九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 課外活動English Speaking Societyに注目したパーラメンタリーディベート経験者のコミュニケーション能力とモチベーション変化に関する研究

上土井，宏太

https://hdl.handle.net/2324/6787691

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：　上土井　宏太

論 文 名　：　課外活動 English Speaking Society に注目したパーラメンタリーディベート経験者のコミュニケーション能力とモチベーション変化に関する研究

区　　分　：　甲

## 論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は、近年急速に普及が進んでいる英語即興型ディベートであるパーラメンタリーディベートを経験することによる影響について、課外活動 English Speaking Society を対象として、コミュニケーション能力とモチベーション変化の観点から明らかにすることである。コミュニケーション能力に関しては、コミュニケーション学で広く用いられている 4 つのコミュニケーション指標（Communication Competence、Communication Apprehension、Argumentativeness、Willingness to Communicate）を用いて分析を行った。モチベーションの変化に関しては、第二言語習得研究で広く用いられている L2 Motivational Self System 等を用いて明らかにした。

本論文の構成について、第 1 章では、研究背景と全体の構成を述べ、第 2 章ではまず、研究対象とする試合形式のディベートについて、ディベートが日本に導入された明治期を起点として、その歴史のレビューを行っている。具体的には、ディベートが日本に導入された歴史的背景について言及した後、本論文で焦点を当てる対象である ESS の成り立ちとその意義について記述している。その後、代表的なディベートのフォーマットの特徴について、今回対象とする即興型のパーラメンタリーディベートと準備型のポリシーディベートの比較に焦点を当てて記述し、パーラメンタリーディベートの特徴とそれを経験することによって得られると想定される効果について明らかにしている。第 3 章では、ディベート経験による様々な教育効果について、批判的思考力、第二言語習得、社会人研修などに幅広く焦点を当て、先行研究のレビューを行った上で、本論文の研究課題であるコミュニケーション能力研究、モチベーション研究に関する必要性を明らかにしている。

第 4 章では、4 つのコミュニケーション指標について、先行研究のレビューを行った後に本研究で検証する仮説、リサーチクエスチョンを設定し、収集したデータの分析を行った。具体的には、(1) 4 つの指標間の相関分析、(2) ディベート経験者・未経験者の比較、(3) 指標の男女間の違い、(4) (2)、(3)で得られたディベート経験・男女間の違いを対象とした更なる統計分析、である。(1)では、今回対象とした日本のサンプルと先行研究で測定されているアメリカのサンプルにおけるコミュニケーション指標間の相関係数の比較を行い、その差について考察を行った。(2)では、ディベート経験者と未経験者のコミュニケーション能力の差について分析を行い、Communication Competence 以外の指標でディベート経験者の値が未経験者と比べて統計的に有意な差を示すことを明らかにした。(3)では、(4)の分析の前段階として、今回対象とした日本人サンプルの男女でコミュニケーション能力に違いがあるか分析を行った。その結果、Communication Apprehension において統計的な有意差が確認され、その差について日本におけるハイコンテクストの文化的背景をもとに考察を行った。最後に(4)では、性別とディベート経験という 2 つの要素を独立変数、コミュニケーション指標の値

を従属変数として ANOVA を行い、結果の考察を行った。

第 5 章では、コミュニケーション能力とディベート経験の相関について更なる分析を行うため、ディベート経験者、未経験者を対象として 4 つのコミュニケーション指標について pre-test/ post-test を行い、その変化についても分析を行った。その結果、対象とするサンプルのディベート経験年数が短いほど、pre-test/post-test の値の差が大きくなり、ディベート経験がコミュニケーション能力に与える影響がある可能性が示唆された。

第 4 章、第 5 章ではコミュニケーション指標の変化という量的な分析を行った一方で、ディベートの影響について広く明らかにするためには質的な側面からの分析も必要であることから、第 6 章では、ESS でディベートを行っている学生を対象として半構造化インタビューを行った。その結果を L2 Motivational Self System 及び Motivation Graph を用いて分析し、ディベートを始めた目的や続けているモチベーションについて明らかにした。一連の分析により、ESS でディベート活動をしている学生が学習環境（L2 learning experience）を重要視している点と、部内や外部の大会で目標とするディベーターを見つけることで理想自己（Ideal L2 Self）を見つけているプロセスについて具体的に明らかにした。さらに、Directed Motivational Currents のフレームワークを用いて、モチベーションの変化と発話されたスピーチの流暢性の関係について分析を行った。最後に、ディベート活動における性別の影響について、実際にディベートを行っている学生にインタビューを行うことで質的な側面からその現状を明らかにした。インタビューの結果、先行研究で述べられている「女性はディベートコミュニティにおいて不利な立場に置かれてきた」という現状について、日本でパーラメンタリーディベートを経験している学生については、そのような状況を感じていない一端が明らかとなった。

第 7 章では、一連の研究で得られた成果を学術的意義・社会的意義の 2 つの側面から整理してまとめを行った。その後、本研究における限界について提示し、最後に今後のディベートを巡る教育・研究の課題と展望を述べている。